

BUDŌ

NEWS

今月のニュース

天皇盃第72回
全日本男子弓道選手権大会
皇后盃第54回
全日本女子弓道選手権大会



男子優勝＝石川嵩、女子優勝＝金田由紀



第12回鹿島神宮奉納
日本古武道交流演武大会



改修工事を終えた研修センターの全景

115名が参列した記念式典

日本武道館研修センター開設五十周年記念式典 武道学園〔勝浦分園〕創立五十周年記念演武会 武道振興に半世紀、厳粛に式典挙行

日本武道館の高村正彦会長が挨拶を行い、続いて千葉県教育庁教育振興部の鈴木智夫体育課主席指導主事兼学校体育班長が熊谷俊人知事の祝辞を代読した。次に土屋元勝浦市長、松崎栄二同市議会議長、最後に国際武道大学の高見令英学長がそれぞれ祝辞を述べ、来賓紹介、祝電披露が続いた。

第2部と第3部では、特設ステージに向かって左（南側）に縦2・5、横4・5のスクリーンを上映会のために設置。「研修センター未来に残す改修工事の映像」「武道学園〔勝浦分園〕写真と映像で綴る五十年」と題して、それぞれ10分程度の映像が流された。

最後に日本武道館の森英介常任理事が閉式の辞を述べ、記念式典は盛会のうちに終了した。

大道場のロビーには武道学園の生徒41名による「武道学園創立五十周年に寄せて」の手書きメッセージが掲示された。学園関係者を中心とした出席者は生徒が書いた思い思いのメッセージを眺め、それぞれに笑みを浮かべていた。

日本武道館研修センターの開設五十周年記念式典と武道学園〔勝浦分園〕の創立五十周年記念演武会が、日本武道館の創立記念日の10月3日、同センター（千葉県勝浦市）で厳粛に行われた。

記念式典・演武会には、来賓・関係者115名が出席。第1部は式典、第2部と第3部はそれぞれ、8月まで実施した研修センターの改修工事と武道学園〔勝浦分園〕50年の歴史を振り返る上映会を行った。当初は武道学園〔勝浦分園〕の生徒による演武会を式典後に企画していたが、コロナ禍により上映会に変更した。

研修センターは、昭和46（1971）年に開設し、今年8月4日に50周年の節目を迎えた。今後も武道修行者に研鑽の場を提供しながら、地域武道の普及・振興に努めていく。

◇

第1部から第3部まで千畳敷の大道場で行い、神前を正面に長さ9メートルの特設ステージを設けた。

第1部の式典開始の正午前には続々と来賓・関係者が集まり、日本武道館の白井日出男理事長が開式の辞を述べて開始した。

来賓祝辞



高見令英
国際武道大学学長

研修センターは昭和46年の開設以来、日本武道館が目的とする地方武道の普及・振興に尽力され、改めて日々のご努力に敬意を表したいと思います。ご承知の通り、国際武道大学は日本武道館が中心となって、建学された大学であります。開学したのは昭和59年ですので、もしその時研修センターがなかったら、国際武道大学はこの地にはなかったのかもしれない。

また、昭和61（1986）年に国際武道大学に隣接して日本武道館武道科学研究センターが開所されました。これにより武道の普及・振興、教育、研究を行う施設が整いました。同センターはその後、平成7年（1995）年に国際武

道大学に移管いただきまして、現在は日本武道館のご支援をいただきながら、武道スポーツ科学研究所として武道領域だけでなく、大学におけるスポーツ科学研究を行える施設として運営しております。

また、研修センターの武道学園では、大学の教職員が指導者として関わっております。子どもたちが幼い頃から武道に親しむことが我が国の武道の普及・振興に繋がること異論を持ちません。我が国の武道のみならず、子どもたちの健全な発達を支えるためにも日本武道館研修センターがますます活発な活動を続けていかれることを祈念いたします。



土屋 元
勝浦市長

日本武道館研修センターは、日本武道館の地方武道館として正力松太郎氏の提唱により昭和43（1968）年に計画され、山口吉暉市長などの市内誘致運動により、昭和46年8月に完成いたしました。50年の歴史を築いてこられた関係者の皆様方のご苦労とご尽力に深く敬意を表し、勝浦市民を代表しまして心より感謝を申し上げます。

貴研修センターはこの歴史のなか、勝浦市を中心に周辺地域や千葉県の武道振興の拠点として武道学園や錬成大会を行い、多くの子どもたちが学び、かけがえない友を獲得し、全国の児童・生徒との交流の機会となりました。ま

た、国際武道文化セミナーでは、訪れた海外の方々が武道精神のみならず、勝浦市を訪れることで多くの文化交流がなされました。本市では研修センターの50年を記念しまして、武道のメッカ・勝浦市をPRするため、10月1日より、職員が率先して挨拶と礼の大切さを実践し、市内全域に広げる運動を推進しています。

結びに、先人が日本武道館研修センターを勝浦市に誘致した熱い思いを受け継いで本市はもちろんのこと、武道を通して全国の青少年の健全育成のための研修の場として広く利用されることを強く望みます。地方武道振興の拠点として、ますますのご発展をお祈りいたします。

主催者挨拶



高村正彦
日本武道館会長

日本武道館研修センター開設五十周年記念式典が執行できますことを心から喜んでおります。日本武道館は、その目的の一つに地方武道館の設置・運営があり、本研修センターは、当財団が直営する地方武道館の第1号としてこの地に開設しました。その後、全国で武道館建設の機運が高まり、令和3年4月までに全47都道府県に武道館が設置され、地方の武道振興の拠点として活動しております。

また、研修センターは、昭和59（1984）年4月に開学した国際武道大学誕生の契機となった施設でもあります。研修センターが50年の確かな歩みを成し得たのも、日本武道館の正力松太郎初代会長など、歴代役員・職員、そして建設を提唱した山口吉暉元勝浦市長をはじめ、関係諸氏のご尽力の賜物であり、深く敬意と感謝を申し上げます。今後とも日本武道館研修センターは、武道振興事業の推進と良質な合宿環境を提供してまいりますので、なお一層のご支援・ご協力をお願いいたします。

閉式の辞



森 英介
日本武道館常任理事



開式の辞



白井日出男
日本武道館理事長



出席者に贈られた記念品の文箱



祝賀会に代えて持ち帰り用の会席膳を用意した

お祝いの辞



鈴木 健
全日本剣道連盟副会長



吉井美恵子
全日本なぎなた連盟専務理事



南 和文
日本相撲連盟会長



三池真幸
全日本弓道連盟事務局次長

来賓として出席した各道の中央団体代表者に、日本武道研修センターが開設50周年を迎えるにあたってのお祝いの言葉をいただいた。

◎三池真幸全日本弓道連盟事務局次長
「日本武道館研修センター開設50周年、誠にめでとうございます。50周年を迎えられるにあたり、通信設備や空調設備の設置など、施設のさらなる充実が図られました。利便性が向上し、これからの研修がさらに素晴らしい成果を上げられることは間違いありません。ご尽力いただきました関係の皆様により感謝申し上げます。

◎南和文日本相撲連盟会長
「さまざまな研修会で利用させていただいており、大変感謝しております。50周年を迎えられ、その間に武道指導者の育成という点で大変貢献されたことと思います。このような施設が重要であると改めて認識しております」

◎吉井美恵子全日本なぎなた連盟専務理事
「50周年おめでとうございます。研

修センターは私が若い頃から利用させていただいております。日本武道館は指導者研修をはじめ、学生や教員のための研修会など、永年にわたってご支援いただいております。多くの指導者がここから育つたように思っております。これからますます研修センターを利用していただき、次世代の指導者を育てて武道の発展に寄与していきたいです」

◎鈴木健全日本剣道連盟副会長
「毎年、5月の銃剣道・短剣道青少年指導者講習会、11月の全国銃剣道指導者研修会、そして1月のA級審判員審査会と銃剣道・短剣道八段審査会を研修センターで実施しており、いづれも地域で中心となる指導者や競技者の交流の場として、また、研鑽の場として活用させていただいております。50周年を迎えるにあたってコロナ禍でもこのように盛大に式典を開催できることは意義あることと思います。これからもますます発展されることを願っております」

来賓祝辞



松崎栄二
勝浦市議会議長

本市における研修センターは、国際武道大学とともに、武道を通じた交流の拠点として、青少年の健全育成や生涯スポーツなどが推進され、地域の活性化にはなくてはならない存在であります。急激な少子化、人口減に悩む本市ではありますが、市議会としても貴重な施設である研修センターを支え、皆さんと一体となつて、魅力ある勝浦市の創出に尽力してまいりたいと考えております。



鈴木智夫 千葉県教育庁教育振興部
体育課主席指導主事兼学校体育班長

貴センターは昭和46年に本県勝浦市に開設されて以来、武道を通して、千葉県下の青少年の健全育成に大きな業績を残されてきました。この間、貴センターの発展に献身的なご努力をされ、今日の隆盛を築かれました関係各位に対し、深く敬意を表します。貴センターの役割は平成24年度からの中学校武道必修化など、学校教育においてもますます重要になっております。今後も武道の普及と振興を通じた本県の魅力ある社会づくりに向け、ご支援をお願いいたします。（※熊谷俊人知事祝辞代読）



映像を観賞する来賓者たち



第2・3部では、スクリーンで上映会が行われた



武道学園生徒のメッセージを見つめる来賓者



挨拶を交わす高見学長（右）と
金澤威武道学園講師（左・合気道）



開設40周年記念「武道演武会」(平成23年)



開設40周年記念事業「武道体験教室」(平成23年)



宿泊者数が100万人達成(平成30年)



開館30周年「記念式典」(平成13年)



相撲道場の竣工式(平成11年)



昭和天皇・香淳皇后が研修センターにお立ち寄り(昭和48年)



研修センター竣工式・落成式(昭和46年)



第1回青少年武道錬成大会(昭和46年)



日本武道館研修センター竣工(昭和46年)

平成11年 (1999)	2月26日	相撲道場が完成
平成13年 (2001)	11月4日	開館30周年「記念式典」を挙行
平成21年 (2009)	12月15日	宿泊棟耐震補強工事が完了。併せて、ロビー・食堂を拡張
平成23年 (2011)	3月6日	弓道場を9人立ちに改築
平成24年 (2012)	7月4日	開設40周年記念事業として勝浦市内小学校5・6年生を対象に「武道体験教室」を開催
平成25年 (2013)	10月8日	開設40周年記念「武道演武会、式典・祝賀会」を挙行。併せて、「日本武道館研修センター四十年史」を刊行
平成27年 (2015)	11月	勝浦市と「災害発生時における施設使用等の協力に関する協定書」を締結
平成28年 (2016)	9月	公益財団法人移行に伴い、宿泊棟入り口看板を新調
平成29年 (2017)	12月	大道場ロビー照明をLEDに更新
平成30年 (2018)	2月	大道場床増し張り工事・弓道場床研磨塗装工事実施
平成31年 (2019)	5月	宿泊棟ロビー・大道場・研修室に無料WiFiを設置
令和2年 (2020)	3月	宿泊棟外壁面防水塗装、西側窓枠サッシ改修工事を完了
令和3年 (2021)	6月	更新 6～7月 防犯カメラ設置
	12月	宿泊棟屋上防水改善工事を完了
	3月	宿泊者数100万人達成。開成学園剣道部に記念品を贈呈
	3月28日	弓道場射場にハイブリッド型輻射空調システムを新設
	1～3月	大道場および道場ロビーにハイブリッド型輻射空調システムを新設。大道場耐震補強及び改修工事を完了
	5月	客室通路に無料WiFiを設置、客室で利用可能。テレビ・エアコンを無料化
	6月	客室通路に空調を新設。研修センター利用における新型コロナウイルス感染症対策を策定
	7月	宿泊・施設設備利用規程を全面的に見直し、宿泊料金を26年ぶりに改定
	10月1日	館内案内掲示板を刷新
	12月	浄化槽更新、大道場大屋根および外壁改修工事を完了
	3月	弓道場・相撲道場照明をLEDに更新。全館LED化完了
	8月	開設50周年「記念式典」を挙行
	10月3日	

昭和42年 (1967)	4月	山口吉暉勝浦市長が日本武道館勝浦分館の誘致活動を開始
昭和43年 (1968)	5月30日	地鎮祭を挙行。敷地造成に着手、8月2日に2万1450㎡の整地が完了
昭和44年 (1969)	7月	勝浦市から「日本武道館勝浦分館誘致に関する陳述書」を受理
昭和45年 (1970)	3月	勝浦市に地方分館第1号として建設が決定
	4月1日	勝浦市と土地賃貸契約書（無償貸与）を締結
	6月16日	関係者約150名が出席し、起工式を挙行
昭和46年 (1971)	8月4日	竣工式を挙行。赤城宗徳理事長をはじめとする武道館役員、文部大臣、中央・地元の政財界、官庁、武道界から約300名が出席。修祓式、落成式に続き、武道始めの儀、記念祝賀パーティーを盛大に開催
	8月6日	利用第1号として文部省、全日本なぎなた連盟主催の昭和46年度全国なぎなた指導者講習会を実施
	8月17日	初の財団主催武道行事として第6回全国高校武道合宿錬成大会（柔道・剣道）を200余名の参加を得て開催
	8月25日	旅館業経営許可を取得
	12月25日	第1回青少年武道錬成大会（現・千葉県青少年少女武道錬成大会）を開催。小・中・高校生約1500名が参加
昭和48年 (1973)	10月3日	天皇・皇后両陛下が千葉県国体ご視察の折に勝浦市を訪問。研修センターでご休憩
昭和52年 (1977)	12月3日	研修室が完成
昭和55年 (1980)	4月25日	7人立ちの弓道場が完成
昭和61年 (1986)	1～2月	大道場床全面を張り替え
昭和63年 (1988)	7～8月	新規主催武道振興事業として千葉県高等学校柔道・剣道・空手道（宿泊）錬成大会を開催
平成3年 (1991)	10月	開館20周年を記念し関係者に記念品を贈呈
平成4年 (1992)	4月	施設設備利用規程を制定
平成7年 (1995)	3月	4階男女浴室を研修室に改修

日本武道館研修センター50年の歩み



最高得点賞＝坂本達雄教士七段



2位＝松田智行教士七段



3位＝柴田誠一錬士五段

3中・1400点となり予選を10位で通過した。
決勝は、無観客の中、各自10射（一手5回）で行われ、的中数によって順位を決めた。4回目（8射）の射を終えて失中がないのは石川のみ。そして柴田誠一（栃木、友安正人（石川）、清水北登（長野）、松田智行（青森）の4名が7中で続く。
最終の5回目、ここまで安定した射を見せる石川は9射目も的中。それに続き柴田、松田も的を射抜く。そして運命の10射目、石川は堂々とした射で見事に的を射抜き10射皆

中。他に皆中者がいないため、この時点で石川が、昭和44年大会での今村鯉三郎氏以来となる2連覇を成し遂げた。
その後、松田が10本目を中てて、9中となり2位を確定した。柴田は10本目を外し8中、9本目を外していた清水と友安が最後を射抜き計8中となり、この3人が3、5位決定戦へもつれ込んだ。順位決定戦は遠近競射によって行われた。競射は、最も真ん中近くを射抜いた柴田が3位になり、4位に清水、5位に友安が続く形となった。

男子 石川 嵩（錬士六段・大分）が2連覇達成 女子 金田由紀（錬士五段・千葉）が初優勝を飾る



天皇盃第72回全日本男子弓道選手権大会 皇后盃第54回全日本女子弓道選手権大会

天皇盃第72回全日本男子弓道選手権大会と皇后盃第54回全日本女子弓道選手権大会は9月19日、東京都渋谷区の全日本弓道連盟中央道場で開催された。男子は石川嵩（大分）が一昨年の大会に続き52年ぶりの連覇を達成、女子は金田由紀（千葉）が悲願の初優勝を果たした。
両大会は昨年、コロナ禍のため中止となり、本年は本来3日間の予定を1日に短縮し、男女同時開催とした。また、全国から選出された選手も通常より大幅に減らし、男女各20名が出場、少数精鋭による熱戦が展開された。

■男子

例年なら予選の前に行われる開会式も中止とし、午前9時より、男子の予選で大会がスタートした。
予選は各自4射（一手2回）を行い、審判員の採点制により決勝に進む上位10名を決定した。
予選では前回大会で最高得点賞を獲得した坂本達雄（青森）が4中・計1504点を出して4回連続の同賞獲得を決めた。
前回大会優勝の石川崇（大分）は



4位＝清水北登錬士五段



5位＝友安正人教士七段

男子優勝者インタビュー



◎優勝Ⅱ石川嵩錬士六段（大分）
「驚きと信じられない気持ちでいっぱいです。今でも夢ではないかと思っています。」

大会前は正直なところ、状態はあまり良くありませんでした。約1週間前のピークから調子は下降気味で、大会前日の稽古も、理想的な弓が引けず、このままでは予選すら通過できないと感じていました。何とか予選を通過することができ、その後の決勝では『いろいろ考えても仕方がない。今できることを一生懸命やろう』と思えたことが、優勝につながったのではないかと考えています。

大会に向けては一日50射を目安にして、基本的に忠実な弓を引くこ

とを常に考え、また、日頃から体配や射技をビデオで撮影し、気になった点を修正することを繰り返しました。今回、優勝という最高の結果を残すことができましたが、予選は10位と上位とは言えず、まだまだ改善すべき点がたくさんあります。

今以上に自己研鑽を積み、技術的にも人間的にも成長し、見る人を魅了するような弓が引けるようになりたいと思います」



天皇盃を受け取る石川錬士六段

男子入賞者インタビュー

◎2位Ⅱ松田智行教士七段（青森）
「決勝で1本外した悔しさはありますが、これまで取り組んできたことを生かした部分もありました。試合後には同じ目標を持って取り組んできた仲間たちが喜んでくれました。」

新型コロナウイルスの影響で地元の弓道場が使用できず、大会当日もあまり良い状態ではありませんでした。特に、試合直前の1カ月間、立を組んでの稽古ができず、非常に苦労しました。日々の稽古では動画を活用して反省点を確認し、それを稽古に反映させました。

次の目標は来年のこの大会で優勝することです」

◎3位Ⅱ柴田誠一錬士五段（栃木）
「今大会が初出場だったため、憧れの先生方と同じ場に立てるだけで幸せだと感じました。そんな中で3位に入賞できたことは奇跡だと思います。また、試合後に息子から『おめでとう！』という連絡が入り、胸が熱くなりました。」

試合当日は、道場に向かう途中や

巻藁調整前に緊張しましたが、恩師に教わったことを思い出し、緊張をプラスの方向に変えました。稽古は矢数より一本に集中することを重視しました。

今後は故増田正美範士に言われた『良いところで抜いてしまう』部分と、試合後に久保田清範士に言われた『若干の送り離れが見られる』という2点を課題に、さらなる高みを目指します」

◎4位Ⅱ清水北登錬士五段（長野）
「練習の成果が結果につながり、大変嬉しいですが、優勝を目標に練習してきたので悔しい気持ちもあります。試合中は矢飛びが悪く迷いがありませんでしたが、心身の状態は非常に良く、冷静に試合に臨むことができました。行射に集中するため、体配は意識しなくてもできることを目標にしました。」

日々の稽古は、先生からの指導や演武の動画を見て練習しました。また切磋琢磨する仲間もいて大変恵まれた環境にいると思います。

天皇盃、遠的選手権、国体など、全ての大会での優勝を目標として、

自分に限界を作らずに精いっぱい頑張ります」

◎5位Ⅱ友安正人教士七段（石川）
「嬉しい気持ちよりも悔しい気持ちの方が大きいです。ただ、入賞できたことは支えてくださった方々に感謝しています。」

今回はコロナの影響で例年通りの稽古ができませんでしたが、できることを行い準備しようと思い、自宅で基本練習をしたり日常生活を振り返ったりして己を見つめ直ししました。当日のコンディションは良かったです。

今回の大会では多くの課題に気づくことができたので、日々の稽古でこの課題を克服し、より良い弓が引けるようにしたいです。来年は心身ともに鍛え上げ、この舞台に戻りたいと思います」

◎最高得点賞Ⅱ坂本達雄教士七段

（青森）

「全国から選抜された選手の中で本賞を受賞できたことは非常に名誉なことだと感じました。しかし、前回よりも点数が下ってしまい、反省し

ています。

コロナの影響で地元の青森ではスポーツ施設が全館閉鎖中のため、前稽古は一切せず、試合に臨みました。また、稽古に関しても職場の異動や新型コロナウイルスの影響で、前、巻藁稽古ができなかったため、イメージトレーニングと自室でのゴム弓稽古のみで本番を迎えました。

大会は今までと同じ、張り詰めた緊張感がありました。通常の稽古ができない事態を突きつけられ、改めて道場での稽古のありがたさを感じました。今後はそれを噛み締めつつ来年の天皇盃を目標に日々の練習を大切に積み重ねていきます」



大会会場となった全日本弓道連盟中央道場



4位＝山本真理子教士七段



3位＝櫻井都五段



最高得点賞・5位＝高井幸子教士八段



2位＝岩切久実教士七段

■女子

予選は男子と同じく採点制により、決勝に進出した高井幸子(福島)が3中・1451点で初の最高得点賞を獲得した。

前回大会優勝の村川春圭(岩手)は2中ながら1394点で全体の5位となり決勝に進出。また、前回最高得点賞の岩切久実(宮崎)は2中・1425点で全体2位で予選を通過した。

決勝2回目(4射)終了時点での4中は予選7位通過の金田由紀(千葉)のみとなる。それに3中の岩切、櫻井都(静岡)、東田留美子(佐賀)、山本真理子(石川)と続く。

決勝3回目(6射)の射、金田は2回目と同様、安定した射で5・6射目を見事的中。これに続き、岩切、櫻井、東田も両射を順調に射抜く。

続く決勝の4回目。金田・岩切・櫻井の3名はしっかりと2射を的中させる。4回目(8射)終了時点での結果は8中の金田がトップ。7中の岩切・櫻井、5中の高井・佐野弥生(山梨)・東田・山本が続く形となった。

運命の5回目。金田は皆中と優勝がかかる緊張した場面ながら、しっかりと的に向かって弓を引き、見事9・10射目を的中させ、初出場での優勝を決めた。

その後、4回目の時点で全体2位の岩切・櫻井は共に9射目を的中させるも10射目を外し、遠近競射での順位決定戦へ。また、4回目までで5中していた3名のうち、高井・山本が6中し、4・5位の順位決定へ進んだ。

順位決定の遠近競射は4・5位から行われ、山本が的に近い部分に矢を放って4位、高井が5位となった。続く2・3位決定競射では、岩切が的の中央近くを射抜いて2位、櫻井が3位となった。

競射後は優勝者へカップと賞状が贈呈され、大会は終了した。



日本武道館の単行本

死ぬまで弓道 弓道教士七段 小牧佳世 著
四六判・上製・342頁・定価2640円
競技中に急性大動脈解離に倒れた筆者は奇跡的な生還を果たす。その8カ月後に弓道を再開し、わずか2年後に皇后盃で十射皆中、優勝を果たした。本書では激動の自伝を記し、弓のあり方や「早気」など弓道家の誰もが陥る課題などを模索する。死の淵を覗き、現在も全身全霊で弓を引き続ける筆者だからこそ記せた弓道伝記かつエッセイ集。

学校武道の歴史を辿る 筑波大学名誉教授 藤堂良明 著
四六判・上製・354項・定価2640円
明治維新を迎え、武術は衰退したが、近代化の過程で武道が「人間形成の道」として学校制度の中に組み込まれ、発展した。太平洋戦争後に武道は全面禁止となるが、それを乗り越え、「格技」として復活。平成24年度には「中学校武道必修化」が実現した。学校武道の歴史を丹念に辿り、今後のあり方を探る。

空手道 その歴史と技法 小山正辰・和田光二・嘉手苅徹 著
四六判・上製・548項・定価2640円
空手は沖縄で発祥し、日本本土に伝承され、今や世界のKARATEとなった。その歴史と技法を、那覇系剛柔流の小山正辰氏、首里系松濤館の和田光二氏、沖縄空手研究の第一人者である嘉手苅徹氏の共同執筆で重層的に紐解く。嘉手苅氏が発見した剛柔流の開祖・宮城長順の最新の事実、小山・和田の両世界チャンピオンのエピソードなども満載。空手の真髄に迫る白眉の一冊。

武道の礼法 弓馬術礼法小笠原教場三十一世宗家 小笠原清忠 著
四六判・上製・282頁・定価2640円
「時、所、相手」に応じた正しい生活態度として現れる礼法。礼法の歴史を伝書をもとに詳述し基本姿勢、動作などを連続写真やイラストとともにわかりやすく解説。小笠原流宗家が「直々指南の礼法解説書」。

マンガ・日本武道風土記 漫画家・別府大学客員教授 田代しんたろう 著
B5判・248頁・定価1100円
全国の「武道ゆかりの地」を実際に訪ねて、ペンとスケッチブックを片手に徹底取材。地元関係者や施設の学芸員とのやりとり、その土地の成り立ちをわかりやすくマンガで紹介。多数の資料をもとに丹念に描いた当時の風景も魅力の一つ。マンガの世界で日本各地をめぐるみては。

幸せについて考えよう 元衆議院議員・博愛会会長 小野晋也 著
四六判・上製・394項・定価2640円
この混迷の時代・社会において「武道」が果たすべき大きな役割とは、「様々な困難を乗り越え切り開く道具を持って、人生を雄々しく歩いていく」という前向きな人生姿勢を一人ひとりに、そして社会全体に取り戻すことにあるのではないだろうか。

合気道に生きる 合気道九段 多田 宏 著
四六判・上製・402頁・定価2640円
昭和初期に生れ、戦後の早大生時代に植芝盛平、植芝吉祥丸、船越義珍、中村天風、日野正一の諸先生の教えを受け、合気道の稽古を生涯の道と志す。昭和から平成への激動の時代に、本部道場師範を務め、各大学に合気会を創設、自らの道場も主宰し、さらに欧州各国への普及に尽力。合気道に活きた泰斗の軌跡を余すところなく示す珠玉の一冊。

ご注文・お問い合わせ
(公財)日本武道館 月刊「武道」編集部
〒102-8321 東京都千代田区北の丸公園2-3
TEL 03-3216-5147 FAX 03-3216-5158
<https://www.nipponbudokan.or.jp>

男子成績																			
立順	氏名	所属	予選			決勝													
			的中	得点	順位	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	的中	射詰	遠近競射	順位
1	石川 嵩	大分	3	1400	10	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	10	○	×	1
2	鹿野 伸一	東京	2	1448	2	×	○	×	×	○	×	×	○	○	×	4			
3	山田 勝也	静岡	0	1388															
4	黒田 素直	山口	3	1415	8	○	×	×	○	×	○	○	×	×	○	5			
5	山本 一輝	熊本	2	1422	7	×	○	×	○	×	○	○	×	○	○	6			
6	清水 義正	岩手	1	1393													○	×	
7	森本 浩之	愛媛	3	1423	6	×	○	○	×	○	○	×	×	○	○	6			
8	荒川 博行	北海道	1	1434															
9	朝田 晋輔	静岡	1	1413															
10	柴田 誠一	栃木	2	1442	3	○	○	○	○	×	○	○	○	○	×	8	○	○	3
11	井上 丈晴	東京	1	1378															
12	五島 博	岡山	4	1380	13														
13	友安 正人	石川	2	1408	9	○	×	○	○	○	○	○	○	×	○	8		3	5
14	長岡 修	和歌山	2	1399	11														
15	藤岡 順	奈良	1	1393															
16	清水 北登	長野	3	1436	5	○	○	○	○	×	○	○	○	×	○	8		2	4
17	橋口 聖矢	鹿児島	1	1387															
18	松岡 誠二	長崎	3	1396	12														
19	松田 智行	青森	3	1438	4	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	9			2
20	坂本 達雄	青森	4	1504	1	○	○	×	○	○	×	○	○	×	×	6			

女子成績																		
立順	氏名	所属	予選			決勝												
			の中	得点	順位	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	の中	遠近競射	順位
1	金田 由紀	千葉	2	1386	7	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	10		1
2	高井 幸子	福島	3	1451	1	×	○	○	×	○	○	×	○	×	○	6	2	5
3	岩切 久実	宮崎	2	1425	2	×	○	○	○	○	○	○	○	○	×	8	1	2
4	櫻井 都	静岡	2	1386	8	×	○	○	○	○	○	○	○	○	×	8	2	3
5	黒川 雅代	宮崎	1	1397														
6	佐野 弥生	山梨	2	1380	9	○	○	×	×	○	○	○	×	×	×	5		
7	星野 信子	愛知	1	1394														
8	小澤 幸子	新潟	0	1370														
9	澤根 規代	岡山	2	1363	11													
10	山田 直美	大阪	3	1411	3	×	○	×	○	×	○	×	○	×	○	5		
11	千葉 香代	福島	2	1388	6	×	×	×	○	×	×	○	×	○	○	4		
12	藤野 寛子	長崎	2	1278	12													
13	久保川富美子	北海道	1	1378														
14	田中みゆき	徳島	0	1347														
15	村川 春圭	岩手	2	1394	5	○	×	○	×	×	×	○	×	○	○	5		
16	東田留美子	佐賀	4	1402	4	○	○	○	×	○	○	×	×	×	×	5		
17	平仲由美子	山口	1	1384														
18	根津 里美	山梨	1	1402														
19	山本真理子	石川	2	1375	10	○	○	×	○	○	×	×	○	×	○	6	1	4
20	竹口 慶子	和歌山	1	1415														

女子優勝者インタビュー



◎優勝Ⅱ金田由紀錬士五段〔千葉〕
「私のような未熟者がこの場に立つことができ、周囲への感謝の気持ちでいっぱいです。その中で優勝は、望外の喜びでした。」

当日は大変緊張しましたが、いつものように弓を引けていたので安心しました。

大会では予選1本目から、やるべきことをしっかりとやり、後悔しない弓を引く何度も自分に言い聞かせました。その気持ちを切らさずに最後までやり通せたことが優勝につながったと思います。

新型コロナウイルスの影響で地元の道場が閉鎖になり稽古時間が激減しましたが、夜間利用できる道場で、毎日1〜2時間ほどの前で弓を引

かせていただきました。これにより、射と心の調子を整えることができました。

試合当日は初出場が無我夢中でしたが、高段の先生方と1日共にでき、たくさんのことを学ばせて頂きました。今後はその経験を無駄にしないよう、さらに修練を積んでいきます」



皇后盃を受け取る金田錬士五段

女子入賞者インタビュー

○2位Ⅱ岩切久実教士七段（宮崎）

「結果につながりホッとしています。大会前は連盟の指示により、感染対策を充分にしながら毎日を過ごしてきました。当日は、心地よい緊張感で臨むことができ、落ち着いていました。稽古では前回大会での課題や先生・先輩方からのアドバイスの一つ一つ改善・克服できるよう取り組んできました。来年もこの大会に出場できるよう、日々の稽古に一生懸命取り組みたいです」

○3位Ⅱ櫻井都五段（静岡）

「この舞台を目標としていたので、入賞でき、驚いています。予選は2回とも甲矢を外し、決勝の1本目が外れた時は弱気になりましたが、3本目からは『甲矢（先に射る矢）が勝負！ 乙矢（後に射る矢）は大丈夫』と自分に言い聞かせました。稽古では動画撮影を行い、大会を想定した稽古に取り組みました。体配は気になる点の克服に努めました。再び全日本選手権の舞台に立てるよう、日々精進します」

○4位Ⅱ山本真理子教士七段（石川）

「4位に入賞でき素直に嬉しい気持ちと、私が入賞してよいのだろうかという気持ちです。予選は特に緊張していました。試合後はどのような時でも常に自分の射ができるように稽古をしなければと痛感しました。今後は射を安定させ、特に会を充実させるために基本に戻って取り組みたいと思います」

○5位・最高得点賞

Ⅱ高井幸子教士八段（福島）

「目標の一つだった栄誉ある賞をいただいて、嬉しい気持ちと同時に責任を果たせてホッとしています。今大会はコロナ禍で出場が叶わなかった弓友たちの思いも一緒に、一射一射誠を尽くして引きました。大会直前まで不安もありましたが、会場に入ると緊張感もほぐれ、ベストコンディションで臨めました。決勝戦は、若手のパワーに引つ張られ、5位まで届くことができました。加齢に伴う筋力の低下は否めませんが、自分の体と対話しながらコツコツ（骨骨）と型の完成に修練していきたいと思っています」



内田康介
日本古武道協会理事・事務局長



錦織孝一
鹿嶋市長



鹿島則良
鹿島神宮宮司



吉川英夫
日本武道館理事・事務局長

力、創意工夫によって出来上がり、練られ、継承されています。その日本の古武道の技と心を鹿島の大神にご奉納し、観覧の皆様方に堪能していただきたいと思っています」

続いて錦織孝一鹿嶋市長が祝辞を述べた。

「コロナ禍ではありますが、本日盛会に開催できますことをお慶び申し上げます。鹿嶋市は武の神である武甕槌大神を祀る鹿島神宮、無敗の剣聖といわれた塚原卜伝誕生地の地、サッカー鹿島アントラーズのホームタウン、そして、東京2020オリンピックにおいて男女サッカーの試合が行われた地であり、歴史と文化、スポーツの街です。演武者の方々は日頃の成果を十分に発揮し、それぞれの流派の伝承された技をご披露いただきたいと思っています」

次に鹿島則良鹿島神宮宮司が歓迎の言葉を述べた。

「ようこそ鹿島神宮へおいでくださいました。昨年は中止となり久しぶりに皆様とお会いでき、武甕槌大神様も喜んでおられると思います。本日は日頃鍛えた技を大神様の前で披露いただき、たくさんの方の参拝者の



参加者による記念写真

方々にもご覧いただきたいと思っています。大会が成功裏に終わることを祈念いたします」

◇

演武は本殿前に特設演武場を設えて行われた。天真正伝香取神道流剣術を皮切りに、全国から集まった21流派が継承されてきた技を披露。コ

ロナ禍にもかかわらず、集まった多くの観客を魅了した。

午前10時から始まった演武大会は約3時間続き、最後は地元流派である鹿島新當流剣術が締め括った。全ての演武が終了し、鈴木達也日本武道館振興部長が閉会宣言を行い、大会は盛会のうちに幕を閉じた。

第12回鹿島神宮奉納日本古武道交流演武大会 21流派が伝統の技を披露



鹿島新當流剣術

第12回鹿島神宮奉納日本古武道交流演武大会（主催：日本武道館、日本古武道協会）が10月10日、武神・武甕槌大神を祀る鹿島神宮（茨城県鹿嶋市）で開催された。昨年は新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受けて中止となったが、今年は出場数を一昨年の37流派から21流派に絞り、コロナ対策を講じて、2年ぶりの開催となった。

◇

午前9時からの昇殿参拝、集合写真の撮影に続き、開会式が行われた。内田康介日本古武道協会理事・事務局長による開会宣言、国歌静聴の後、吉川英夫日本武道館理事・事務局長（日本古武道協会常任理事）が主催者あいさつを行った。

「一千数百年の歴史を持つ日本の古武道は、護身の術に端を発し、現在へと引き継がれています。中核をなすのは、『惻隠の情』であり、敵でさえも思い遣る心配りです。その精神は現代武道にも引き継がれており、東京2020オリンピック・パラリンピックにおける柔道、空手競技において、その一端を垣間見ることができました。技は先人の創造



神道無念流剣術



荒木流拳法



柳生新陰流兵法剣術



天真正伝香取神道流剣術



荒木流軍用小具足



心月無想柳流柔術



天道流薙刀術



天神真楊流柔術(新座市)



天然理心流剣術

武甕槌大神の御前で
伝承された技を披露



戸田派武甲流薙刀術



大東流合気柔術



鞍馬流剣術



小野派一刀流剣術



金硬流唐手・沖縄古武術



立身流兵法



直心影流薙刀術



天神真楊流柔術(川越市)



神道夢想流杖術



北辰一刀流剣術



無比無敵流杖術

【出場流派・参加者】

- ① 天真正伝香取神道流剣術(京増重利、荒野祥司、成毛弘、櫻井俊也)
- ② 心月無想柳流柔術(桑波田秀祐、奥村宗一郎)
- ③ 天然理心流剣術(常田貞行、須田英宏、小林恵子)
- ④ 天道流薙刀術(木村恭子、木村有里、細井優子、清水真由美)
- ⑤ 柳生新陰流兵法剣術(柳生耕一、竹内孝幸、瀧上俊顕、寺田裕昭)
- ⑥ 荒木流拳法(菊池邦光、西川二郎、細野桂一、鈴木崇史)
- ⑦ 神道無念流剣術(小川武、萩崎昭、土屋正則、玉根純也)
- ⑧ 天神真楊流柔術(新座市)(坂本忠彦、渡邊卓也、古川眞一)
- ⑨ 荒木流軍用小具足(千葉明、河野真一、鶴岡嘉治、鈴木優輔)
- ⑩ 金硬流唐手・沖縄古武術(早坂ゆかり、佐々木透、早坂義文、大和久正幸)
- ⑪ 鞍馬流剣術(柴田章雄、渡辺良雄、吉田稜寛、松井康二)
- ⑫ 直心影流薙刀術(野崎房江、福嶋相子)
- ⑬ 小野派一刀流剣術(矢吹裕二、石崎徹、門松猛、鈴木宏哉)
- ⑭ 神道夢想流杖術(大竹俊行、安田嘉一、神之蘭文男、時任晴美)
- ⑮ 立身流兵法(加藤紘、山田市郎、圖司行克、山崎恒弥)
- ⑯ 戸田派武甲流薙刀術(建入久代、永埜浩司、本多日向子、福永護)
- ⑰ 大東流合気柔術(近藤昌之、白山秀遠、滝口太土、味岡功磨)
- ⑱ 無比無敵流杖術(根本憲一、村木浩治、沢幡伸男、小國英智)
- ⑲ 北辰一刀流剣術(高山陽好、上田忠夫、田中榮治、兼子勝喜)
- ⑳ 天神真楊流柔術(川越市)(柴田孝一、柴田俊充)
- ㉑ 鹿島新當流剣術(小松崎政史、横尾廣美、今井淳也、橋本大)

以上、21流派・76名参加

演武大会の開催に先立ち 術技交流研修会を開催

術技交流研修会が大会前日の10月9日、鹿島神宮内の武徳殿で行われた。コロナ禍での開催を考慮し、密を避けるために入れ替え制で実施された。各流派の参加者たちは、それぞれの技の精度や間合いを丹念に確認し、翌日の大会に備えた。なお、懇親会はコロナ禍のため中止となった。



真剣な表情で技の精度を確かめる参加者たち



研修会の開会式で歓迎の言葉を述べる鹿島神宮の天海尉之禰宜（ねぎ）

日本武道館の単行本



死ぬまで弓道 弓道教士七段 小牧佳世 著
四六判・上製・342頁・定価2640円

競技中に急性大動脈解離に倒れた筆者は奇跡的な生還を果たす。その8ヵ月後に弓道を再開し、わずか2年後に皇后盃で十射皆中、優勝を果たした。本書では激動の自伝を記し、弓のあり方や「早気」など弓道家の誰もが陥る課題などを模索する。死の淵を覗き、現在も全身全霊で弓を引き続ける筆者だからこそ記せた弓道伝記かつエッセイ集。



学校武道の歴史を辿る 筑波大学名誉教授 藤堂良明 著
四六判・上製・354頁・定価2640円

明治維新を迎え、武術は衰退したが、近代化の過程で武道が「人間形成の道」として学校制度の中に組み込まれ、発展した。太平洋戦争後に武道は全面禁止となるが、それを乗り越え、「格技」として復活。平成24年度には「中学校武道必修化」が実現した。学校武道の歴史を丹念に辿り、今後のあり方を探る。



空手道 その歴史と技法 小山正辰・和田光二・嘉手苺徹 著
四六判・上製・548頁・定価2640円

空手は沖縄で発祥し、日本本土に伝承され、今や世界のKARATEとなった。その歴史と技法を、那覇系剛柔流の小山正辰氏、首里系松濤館の和田光二氏、沖縄空手研究の第一人者である嘉手苺徹氏の共同執筆で重層的に紐解く。嘉手苺氏が発見した剛柔流の開祖・宮城長順の最新の事実、小山・和田の両世界チャンピオンのエピソードなども満載。空手の真髄に迫る白眉の一篇。



武道の礼法 弓馬術礼法小笠原教場三十一世宗家 小笠原清忠 著
四六判・上製・282頁・定価2640円

「時、所、相手」に応じた正しい生活態度として現れる礼法。礼法の歴史を伝書をもとに詳述し基本姿勢、動作などを連続写真やイラストとともにわかりやすく解説。小笠原流宗家が直々指南の礼法解説書。



マンガ・日本武道風土記 漫画家・別府大学客員教授 田代しんたろう 著
B5判・248頁・定価1100円

全国の「武道ゆかりの地」を実際に訪ねて、ペンとスケッチブックを片手に徹底取材。地元関係者や施設の学芸員とのやりとり、その土地の成り立ちをわかりやすくマンガで紹介。多数の資料をもとに丹念に描いた当時の風景も魅力の一つ。マンガの世界で日本各地をめぐるみては。



幸せについて考えよう 元衆議院議員・権威者 小野晋也 著
四六判・上製・394頁・定価2640円

この混迷の時代・社会において「武道」が果たすべき大きな役割とは、「様々な困難を乗り越え切り開く道具を持って、人生を雄々しく歩んでいく」という前向きな人生姿勢を一人ひとりに、そして社会全体に取り戻すことにあるのではないだろうか。



合気道に生きる 合気道九段 多田 宏 著
四六判・上製・402頁・定価2640円

昭和初期に生れ、戦後の早大生時代に植芝盛平、植芝吉祥丸、船越義珍、中村天風、日野正一の諸先生の教えを受け、合気道の稽古を生涯の道と志す。昭和から平成への激動の時代に、本部道場師範を務め、各大学に合気会を創設、自らの道場も主宰し、さらに欧州各国への普及に尽力。合気道に活きた泰斗の軌跡を余すところなく示す珠玉の一篇。

ご注文・お問い合わせ

(公財)日本武道館 月刊「武道」編集部
〒102-8321 東京都千代田区北の丸公園2-3
TEL 03-3216-5147 FAX 03-3216-5158
<https://www.nipponbudokan.or.jp>

